

〔研究ノート〕

フランスのアフリカ政策に関する考察

中 村 宏 毅

(パリ第一大学政治学学部博士課程)

サルコジ大統領が就任して間もなく五年が過ぎようとしている。サルコジ大統領は内相時代の二〇〇六年五月、アフリカを歴訪した際、ベナンのコトヌで演説し、「我々は、新しく、健全で、先入観から自由で、均衡のとれた、地中海の両側に残存する過去の残滓と時代遅れの遺産から自由な関係を構築しなければならない。そのためには、幾つかの根本的な変革が必要であるが、すでに実行に移されている変革もある。まず、この関係は透明でなければならない。過去のネットワークや、当初の目的と全く異なるマンデートしかない非公式なミッションを廃止しなければならない。過去にあまりにも多くの危害をもたらした、非公式な使節より政治及び外交機構の通常の機能が優先されなくてはならない。へつらいと秘密と曖昧さから、必ずページをめくらなければならない。また、我々は我々の関係が個人集中化することに満足してはならない。近代的な国家間の関係は、国家元首達の間の関係の善し悪しにのみ立脚するのではなく、率直で客観的な対話、双方の利益の照会、

約束を実行することに立脚すべきである。我々は、責任あるパートナーと対等の立場で対話しなくてはならない。我々は、先入観から自由で、また優越感も劣等感も持たず、罪悪感も相手に利用されているという疑いもなく、相手に過ちの責任を転嫁する誘惑もない関係を築かなければならないと述べ、フランスのアフリカ政策の変革を訴えた。サルコジ氏のこのような発言はもちろん、二〇〇七年の大統領選挙を睨んで、シラク大統領を牽制する意図があったと推定される。伝統的なド・ゴール主義者であるシラク大統領は、フランスは大国であったし、その地位を保持するべきであると考えていた。そのためには、フランスの外交は英米に追従することなく、独立し、フランス国家の偉大さを体現するべきであると考えていた。したがって、フランスの植民地主義の遺産であるフランス語圏アフリカとの特権的な紐帯を最大限に利用し、国際舞台での影響力を維持しようとした。アフリカはフランスの影響力を維持するための勢力圏 (Précarie) であり、そのためには民主主義や人権といった原理原則を多少犠牲にしても、有力な国家元首との友好関係を優先にした。

サルコジ氏 (当時内相) のこのような発言は、当時のシラク大統領を牽制し、その外交を批判し、改革を訴える狙いがあった。そして、このような改革は、サルコジ大統領が選挙運動中に頻繁に訴えた過去からの断絶 (rupture) の一環であったのであろう。そのような過去からの断絶は実現されたのであろうか。サルコジ政権が成立し、五年が経過しようという今日、包括的な研究を伴うものではないが、主要な最近の事案を例に取り、フランスのアフリカ外交における改革の進行状況を取りまとめ、分析することが本稿の目的である。

ポイントとして以下の点が上げられる。

- フランスのアフリカ政策は、世界の他の地域と比べ、植民地独立後も旧植民地諸国と旧宗主国との強い紐

帯を維持する特別なものであった。

● フランスのアフリカ政策においては、常に植民地の遺産を維持しようという潮流と、そのような関係を改革しようとする潮流があった。

● サルコジ大統領は、防衛分野でフランスのアフリカの「憲兵」としての役割を見直し、防衛協定の公表、フランス軍基地の統廃合を進め、アフリカの平和維持分野での自立を促す改革を進め、一定の成果を挙げている。

● 経済協力の分野でも、フランス語圏優先を改め、経済成長を見込める地域に優先的に援助を供与する方針を掲げている。

● 他方、ブルジ弁護士の活躍に見られるように、過去のネットワーク（レゾー）も継続されている。

● フランス外交を大局的な見地から見ると、サルコジ大統領は経済的利益を優先する観点からアフリカより中東を優先する傾向がある。また、アフリカ内ではより経済的な利益を見込める南アフリカやナイジェリアを重視しているため、フランスのフランス語圏アフリカに対する外交は標準化されつつある。

一 フランスのアフリカ政策の歴史

(1) フランス・アフリカ関係の特殊性

アフリカはフランスにとって常にその外交の優先地域であった。それは、フランスとアフリカの植民地支配の歴史が長く、深いものであったことに起因する。フランスの植民地政策をイギリスの植民地政策と比較する

と、イギリスがインドなどで、既存の地方貴族の権力を利用し、間接支配を行っていたのに対し、フランスがアフリカなどで直接支配政策を取り、より本国と植民地との間に強力な絆を築いたことが指摘できる。

ダブジ (Pierre DABEZIES) 元ガボン大使は、フランスの植民地政策を次のように表している。「イギリス人は、イギリス人以外がイギリス人のようになりうるということなど、今まで一度も考えたことはなかった。それ故、植民地に対して同化政策あるいは連帯政策といった終わりのない熟考をすることなく間接支配を行ってきた。その統治方法は、恐らくフランスの「直接統治」より賢明な方法であったろう。それ故、クリケツトや紅茶の習慣ばかりでなく、コモンウェルスや議会主義など重要な習慣を残しつつ、如何なる感情もなく、然したる大きな問題もなく、植民地から去っていくことが出来たのである。ところが、フランスは、フランス連合の苦難や枠組み法、フランス共同体の失敗等を経て、旧植民地諸国との関係の維持に腐心した為、植民地化はイギリスのそれより骨を折るものであった。植民地同化政策による部分的に共有された文化の浸透から、その文化を共有するという自尊心とそれを維持していきたいという意思から、一種の家族的な感情が芽生えた。その為、フランスの植民地諸国は全体として独立を要求したが、フランスからの完全な独立を望んだわけではなかった。こうしたことから、フランスとフランス語圏アフリカ諸国との間に例外的で特殊な関係が生まれたのである。」この発言に集約されるように、アフリカとフランスの紐帯は、政治、経済分野に限られず、文化、そしてフランス語という言語にまで及ぶ深いものであった。

また、フランスにとってもアフリカは帝国の偉大さを維持するための重要な勢力圏 (Décarte) であった。パリで観光名所の凱旋門を訪れると、石の床にド・ゴール將軍が一九四〇年六月一八日にBBC放送を通じて行った演説の文句が「(前略) ドイツ軍の戦車、航空機、戦術により、我らは態勢の整う前に不意をつかれ、

今日の状況に至っているのだ。もはやこれまでなのか？希望は消え失せたのか？敗北は避けられないのか？違う！私を信じて欲しい！一部始終を見てきた私だからこそ言える。フランスは何も失ってははいない。我らを敗北させたのと同じやり方で、いつか勝利を呼び込むのだ。フランスはこれで終わりではない！我らにはまだ大きな帝国領土が残っているではないか！海を支配し戦い続けている大英帝国と手を組んで敵を包囲するのだ。アメリカの無限ともいえる工業力をイギリスのように利用しようではないか。この戦争は不幸な我が母国を奪っただけでは終わらない。なぜならこの戦争は世界大戦なのだ。（後略）」と彫り込まれている。³⁾ド・ゴール将軍のこのような言辭は、フランスとアフリカの強い紐帯を示唆するとともに、仏が偉大であるために、そして大国の地位を維持するために、フランスがアフリカを必要としていたことを表している。また、実際にド・ゴールは自由フランスの首都をブラザビルに置いたし、植民地出身のフランス軍兵士は第一次、第二次世界大戦で大きな役割を果たした。例えば、第二次大戦のトゥーロンでの戦闘の際には、連合軍の半数が植民地出身の兵士だったと言われている。

したがって、フランスは第二次世界大戦後、このような深い繋がりを持つ、植民地諸国の独立を簡単には容認しなかった。それは、インドシナ戦争に至った東南アジアにおいても同様であったが、植民地支配の歴史が古く、それだけにあらゆる分野で繋がり強いアフリカでは、植民地独立に対する反対はより強かった。しかしながら、一九五〇年代、植民地独立は世界的な潮流になっており、フランスもその流れに抗し難くなった。このような状況下で、ド・ゴールは、特に独立機運が高まっていたアルジェリア等を留めるために、一九五六年にフランス共同体の構築を提案する。このフランス共同体は、植民地に大幅な自治を認め、フランスは通貨、防衛、戦略的天然資源の分野においてのみコントロールを継続するというものであった。さらに、

ド・ゴールはフランス語圏フランス共同体に属する国は、将来独立を交渉できることを提案した。フランス共同体に加盟した国は、その後次々に独立した。しかし、ギニアを除くフランス植民地アフリカ諸国がフランス共同体に加盟し、これらの国々がすぐに全面独立を望まず、フランスと連帯する道を選んだことは、フランスとアフリカの紐帯の強さを示唆するものである。そのような強い繋がりが独立後もフランスとアフリカの間を強く規定したのである。

(2) 「伝統派」

フランスのアフリカ外交は、大きく「伝統派」と「改革派」に分けて分析されることが多い^①。フランスのアフリカ外交における「伝統派」は、第二次世界大戦後、米ソの台頭により相対的に低下するフランスの外交的プレゼンスを維持するために、このようなフランスの植民地時代の遺産を利用しようとした。アフリカは、国連の総会などの国際舞台でフランスの立場を強化し、フランスの外交力を向上させるための大切な支援者であった。そうであったからこそ、アフリカはフランス外交において特別な地位を与えられた。大統領府には外交班とは独立してアフリカ班が設けられ、大統領を直接補佐した^②。そして、七区のムッシュー通りにある植民地省は、協力省と名前を変えられた上で残され、外務省からは独立し、大統領府のアフリカ班と緊密に連携し、旧植民地諸国との外交を取り仕切った^③。この「アフリカ省」^④は、「勢力圏国 (pays du champs)」に対する援助を一手に引き受け、大きな権力を有した。「勢力圏外国 (pays hors champs)」に対する開発援助が外務省と財務省の折衝によって決定されていたことを考えれば、協力省の自由裁量の大きさは自明である。このように、アフリカはフランスの外交機構上においても、特別扱いであったのである^⑤。

また、フランスの伝統的なアフリカ政策はしばしば旧友外交と呼ばれ、フランスは人権や民主主義などの原則を尊重しない国家元首とも、積極的に友好関係を築いていった。そのような旧友外交を公式、非公式の双方のチャンネルを使って巧みに操った代表的人物がド・ゴール大統領の懐刀のジャック・フォカール (Jacques Foccart) である。フォカールは、ネットワーク作りの天才であり、フォカールが造り上げた巧妙な人的ネットワークと諜報ネットワーク・システムがアフリカ諸国との特殊な関係とその影響力を維持したいフランスの政策を大いに助けていった。このようなフォカール・ネットワークは、現地での様々な情報収集、ド・ゴール派政党の選挙資金の調達、治安維持、フランス企業のアフリカ進出等を手助けした。¹⁰⁾ このような非公式なネットワークに基づく外交は当然、腐敗や犯罪の温床になり、フランサフリックという表現で揶揄された。¹¹⁾ しかし、そのような揶揄は汚職や暗殺など事件性を過剰に強調し、スキャンダラスな面のみに着目し、フランス・アフリカ関係の本質に関する冷静な洞察を欠くことが多い。もちろん、フランスとアフリカとの不透明な関係は時に、紛争を助長するなどの面があったが、フォカール自身はフランスの国益を最優先に考えて、綿密な計算によってアフリカ外交を指揮していた。このようにフランスのアフリカ外交における「伝統派」は、公式な外交と非公式な外交を巧みに操り、フランスのアフリカにおける影響力を維持し、フランス・アフリカの特権的な関係の維持に努めた。

具体的には、フランスはアフリカ諸国と非公表の防衛協定を結び、フランスに友好的な政権がクーデターや内乱などで脅かされたときには、これらの政権の側に立って保護し、フランスに敵対的な政権を反政府勢力への軍事援助によって打倒してきた。¹²⁾ また、援助政策においても、友好国を厚遇する傾向が強く、例えば、一九九四年のフランスのガボンに対する援助は一人あたりの額において、ニジェールの約七倍であり、ブルキ

ナリファソの約一〇倍である。石油資源が豊富で一人あたりのGDPも高いガボンの厚遇は、フランスが民主主義や貧困の削減より、石油利権の確保やボンゴ大統領の国際舞台での影響力を重視したとの非難を受けている。¹⁴

(3) 「改革派」

フランス・アフリカ関係の否定的な側面に対する非難は次第に強くなり、それに伴いフランス・アフリカ関係の改革も試みられるようになった。一九九〇年には、当時のミッテラン大統領が有名なラ・ポール演説を行ない、民主主義と経済発展を結びつけ、フランスの開発援助を民主化と結びつける原則を打ち出した。例えば、ミッテラン大統領は「(前略) 私はこれがあなた方の進むべき道であると言うことができるであろうか。私は、一人の地球の市民として地球の市民に語っていることである。あなた方は、自由の道を進むことと同時に、発展の道を進むのだ。さらに、公式は逆にもできる。発展の道を選択することによって、あなた方には民主主義が約束されるのである(後略)」¹⁵と述べている。

また、バラデュール元首相によって一九九三年から進められた「アビジャン・ドクトリン」は、フランスの開発援助の基準をブレトンウッズ機構の構造調整プログラムの進行状況に追従させることを目指した。この「アビジャン・ドクトリン」の推進は、ラ・ポール演説ほどのメディア的な注目を集めなかったが、フランスのアフリカ政策に少なからず影響を与えた。つまり、これまではアフリカの友好国に優先的に、そしてガバナンス等の諸問題に大きな注意を払わずに与えてきたフランスの開発援助を世銀によって課された構造調整プログラムの基準に結びつけることによって、フランスのアフリカへの開発援助を国際的な基準に一致させ、より平均

化し、透明化することを志向したのである。⁽¹⁶⁾ アビジャン・ドクトリンの適用によって、一九九四年にCFAフランが切り下げられたことが示すように、フランスのアフリカ政策に変化が認められた。

このように、フランスはブレトンウッズ機構の要求にしたがって、CFAフランを切り下げた。しかし、同時に切り下げによる対外債務の膨張によって破産の危機に陥ったカメルーン、中央アフリカ、コートジボワールに多大な経済援助を供与し、保護する姿勢を見せた。「グッド・ガバナンス」に関して問題の多いこれらの国に対する経済援助は、フランスが本気でコンディショナリティーを尊重する意思があるのかを疑わせることになった。⁽¹⁷⁾

(4) ミッテラン大統領のアフリカ政策

フランスのアフリカ政策は、先述のように次第に「改革派」の挑戦を受けるようになるが、戦後は、「伝統派」が支配的であった。それは、右派、左派に関係なく維持された。なぜなら、フランスの旧植民地アフリカとの紐帯は、フランスの国際舞台での地位の維持、または強化の原則に基づくためである。野党時代にはド・ゴール主義に批判的であったミッテラン大統領でさえ、英米のヘゲモニーに対するフランスの独自性、フランス外交の独立に固執していた。そのために、フランスの核抑止力の維持等により、防衛を英米に依存することを阻止し、外交力を強化することを試みた。そのような外交方針において、仏の支援者である旧植民地のアフリカ諸国との関係を維持、強化することは必要不可欠であった。一九五三年のミッテラン大統領による「ビゼルトからカサブランカまで、北アフリカにおけるフランスの影響力の維持は私にとってあらゆる政治問題の中でも一番の課題である」という発言は、旧植民地に対する彼の考え方を明確に示している。したがって、ミッテラ

ン大統領は旧植民地諸国との特権的関係の維持に努め、実子のジャン・クリストフ・ミッテランを大統領府の
アフリカ担当補佐官の地位に据え、フランスと旧植民地アフリカとの特権的関係の維持に充てさせた。⁽¹⁹⁾

(5) シラク大統領のアフリカ政策

シラク大統領の任期中においては、フランスのアフリカ政策における「伝統派」と「改革派」のせめぎあい
が続いた。ド・ゴール主義者であることを自他ともに認めるシラク大統領は、ド・ゴールの右腕であり、全幅
の信頼を受けていたフォカールを重用した。高まる批判を受けて、フォカールを大統領府のアフリカ担当補佐
官に任命することはなかったが、エリゼ通りの一四番地にオフィスを与えて、大統領の個人代表に任命した。
したがって、大統領府には、エリゼ通り二番地のデュブシュに率いられた公式のアフリカ班と一四番地のフォ
カールに率いられた非公式のアフリカ班が併存することになり、たがいにシラク大統領の好意を求めて競争す
ることになった。⁽²¹⁾ この二つのアフリカ班のコアビタシオンは比較的穏健に推移した。しかし、この事実、シ
ラク政権のアフリカ政策が、特権的関係の維持とその改革の間で揺れていたことを示唆する。⁽²²⁾

そのような二つの潮流が並立する状況において、その均衡に大きな変化をもたらしたのは一九九七年のフォ
カールの死とジョスパン首相の指名であった。ジョスパン首相はアフリカ政策に関し新たに「介入せず、無関
心でもない (ni ingérence, ni indifférence)」と呼ばれるドクトリンを打ち出した。このドクトリンに従い、フ
ランスは一九九七年にコンゴ(共)で、リスバ大統領とサス・ンゲソの民兵が衝突した際には、頑なに中立を
貫いた。⁽²³⁾ また、一九九八年にコートジボワールでゲイ将軍がクーデターでコナン・ベディエを打倒した際にも
介入は行なわれなかった。⁽²⁴⁾

しかし、二〇〇二年にシラク大統領が再選され、国民議会の多数派を得て、ラファランが首相に選出され、コアビタシオンが解消されると、フランスのアフリカ政策において「伝統派」が巻き返すことになる。ドクトリンの転換を示唆するのは、これまで介入を控えていたコートジボワールへの介入である。フランスは、二〇〇二年九月一九日に「コートジボワール愛国同盟」が蜂起すると、自国民の保護を名目にコートジボワールにリコルス軍と呼ばれる、五〇〇〇名に上る国軍を派遣した。当時のシャンプパーニュ・ドラブリオル (Jacques CHAMPAGNE de LABRIOLLE) アフリカ担当補佐官は、「ジョスパンの政策に対し、アプリアリに介入を排除しないのが我々の立場である。なぜなら、抑止効果があるからである。(中略) フランスが何もしないから、隣人を攻撃しても良いとは誰にも言えない。また、フランスが何もしないから、どのように統治しても良いと言いうこともできない」と述べている。この発言にはアフリカへの介入を控えるジョスパン政権のN I - N I 政策から、多国籍主義を標榜しつつ、「アフリカの憲兵」として、反乱やクーデターに対し積極的に介入する姿勢への回帰が見受けられる。例えば、先述のリコルス軍には安保理のマンデートが付されているとは言え、フランス軍の参謀部は、指揮権を保持することを望み、UNOCI (国連コートジボワール活動) 軍の指揮からは独立していた。⁽²⁶⁾ また、二〇〇三年にコンゴ (民) のブニアの住民を保護するためにフランスは安保理でインシアティブを取り、ESDP (欧州安全保障防衛政策) の最初の軍事作戦であるアルテミス作戦を実施することになった。しかしながら、一部の専門家は、「トルコ石作戦」⁽²⁷⁾ の苦い経験を繰り返さず、介入を正当化するために、EUの枠組みを利用したと分析している。⁽²⁸⁾ このように、二期目のシラク政権下では、「アフリカの憲兵」として、フランスが紛争に介入することを厭わない「伝統派」の巻き返しが顕著になった。

二 サルコジ政権のアフリカ政策

(一) 外交、防衛分野での変化 (Changement)

サルコジ大統領のアフリカ政策を特徴づけるのは「変化」と「継続」(Changement et continuité)である。サルコジ政権のアフリカ政策の意思表明として、まず二〇〇七年七月二六日にサルコジ大統領がセネガルを訪問し、ダカール大学で行ったダカール演説と二〇〇八年二月二八日に南アを訪問し、南ア議会で行ったケープタウン演説が重要である。この有名な演説は、フランス外務省や大統領府の外交班に相談することなく、ゲノ大統領特別補佐官が執筆したものであるといわれている。一方、ケープタウンにおける演説は、外務省や大統領府の外交班の考え方がより反映されたものになっている。

ダカール演説については、人種差別的とも解釈され得る発言が強い批判の対象になった。²⁹⁾ 他方、ダカール演説はフランスの植民地支配のアフリカに与えた影響を相対化することによって、現在のアフリカの低開発に対するアフリカ人自身のオーナーシップを促すことを意図していると解釈することもできる。例えば、サルコジ大統領は「植民地支配がアフリカの直面する全ての問題の原因ではない。植民地支配はアフリカ人同士の血なまぐさい戦争の原因ではない。植民地支配はジェノサイドの原因ではない。植民地支配は独裁の原因ではない。植民地支配は幻想の原因ではない。植民地支配は汚職の原因ではない。植民地支配は浪費と汚染の原因ではない」と述べている。³⁰⁾ このような発言は、反フランス感情の強い旧植民地で為されるには著しく配慮を欠くものであったが、アフリカ人の問題をアフリカ人に帰することによって、フランスとアフリカの紐帯を相対化する意図があったと推定できる。

そして、南アを訪問した際にはフランスとアフリカ関係を再構築 (reorder) するための具体的措置として軍事協力分野や経済協力分野に亘る提案をしている。まず、安全保障分野でサルコジ大統領は「私は南アの議会の前で四つの提案をしたい。第一の提案は、フランスとアフリカ諸国との防衛協定に関するものである。フランスとアフリカの防衛協定は、昨日のアフリカではなく、今日のアフリカを反映しなければならぬ。フランスとアフリカとの防衛協定はフランスとアフリカのパートナーとの戦略的利益に基づかなければならない。私は、全てを白紙に戻し、一掃しようと言っているのではない。しかし、私は、フランスが協定を現状に適応させ、アフリカ諸国の意思を考慮に入れるためにアフリカ諸国との協議を開始することを望む。フランスは、安全保障分野でフランスと新しい協力関係を結ぼうとする全ての国との協議にオープンである。第二の提案は、私は、フランスとアフリカとの関係にこれまで存在しなかった原則、つまり透明性の原則を導入したい。透明性が強固で継続的な関係を保証し、幻想と無理解を廃する。私は南アの議会において、フランスとアフリカとの防衛協定は完全に公表されることを表明する。また、フランスのアフリカ政策の大きな意思決定には国民議会を関与させる。第三の提案として、私は、アフリカが望んでいるように、アフリカにおける軍のプレゼンスがアフリカ自身による集団安全保障を支援するようにすることである。AUは、アフリカ待機軍を二〇一〇年から二〇一二年までに持つことを希望している。それは、まさに私が望んでいることでもある。フランスには、無制限にアフリカに軍事力を駐留させる資格はない。アフリカは、自身の安全保障問題に責任を持たなくてはならない。(中略)そして、私の最後の提案は、欧州が平和と安全保障の分野でアフリカの主要なパートナーになることを目指すものである。それが昨年二月に、リスボンで結ばれた我々の二つの大陸の間の合意の方向性である。それは、我々すべての利益である。なぜなら、強い欧州は強いアフリカを必要としてい

るからである」⁽³¹⁾と述べ、フランスのアフリカにおける軍事的プレゼンスの見直しを訴えている。

ケープタウン演説で表明されたフランスのアフリカ政策の改革は、着実に実施されている。二〇〇八年六月に発表された国防白書では、フランス軍の海外展開の見直しの一環として、アブダビにフランス軍基地を建設し、六ヶ所あるアフリカのフランス軍基地（ジブチ、レユニオン、リーブルビル、ダカール、アビジャン、ンジャメナ）を二つの極（*deux pôle*）に縮小することを提言した⁽³²⁾。また、フランスは基地の統廃合以外にもフランスのアフリカにおける軍事的プレゼンスを低下させている。フィヨン首相は、二〇〇九年一月二九日、国民議会で演説し、チャド東部及び中アに展開されているEU軍（EUFOR）が、MINURCATに移行するのに伴い、現在一六五〇人の人員を一〇〇〇人以下まで削減すると同時に、コートジボワールに派遣されているリコルヌ軍を二〇〇九年夏までに、一八〇〇人から半減させることを表明した⁽³³⁾。リコルヌ軍は、シラク政権第二期目に派遣され、フランスの介入主義への寄り戻しの発露と考えられていただけに、その縮小には象徴的な意味がある。

また、ケープタウン演説からほぼ一年経過した二〇〇九年三月、トーゴとの新防衛協定が公表された。サルコジ大統領の改革は、アフリカ諸国との防衛協定を含むフランスがフランス語圏アフリカ諸国と結んでいる秘密の条項を交渉により廃止し、新しい条約を結び公表することを意図している。これらの秘密条項は、旧植民地において反乱、クーデター等が生じフランスに友好的な政権が脅かされた時は、フランスが「アフリカの憲兵」として介入することの根拠になってきた。したがって、トーゴにおける新防衛協定の締結は、フランス・アフリカ関係の改革が一步前進し、フランス・アフリカ関係が透明化されたことを意味する。他方で、防衛協定の見直しのためのアフリカ諸国との交渉は難航し、特に、ジブチ、セネガル、ガボンなどの重要なフランス軍基

地を有する国とは、交渉の妥結に長時間を要し、ガボンとの防衛協定は二〇一〇年二月、ジブチとの新防衛協定は二〇一一年一月に署名されたが、セネガルとは、依然交渉が継続されている。

防衛協定の見直しは、フランス・アフリカ関係の改革の進展を図る重要なバロメーターであり、この見直しに予想以上の時間を要したことはフランス・アフリカ関係の二面性を良く表している。つまり、フランスもアフリカ諸国も、表向きはフランス・アフリカ関係の変革を叫びながらも、実際はその関係の保持に執着していることを示している。

また、アフリカの集団安全保障に対する支援も進んでいる。フランスが、国連の場で、イニシアティブを取り、開始したアフリカ諸国の平和維持能力向上プログラムであるRECAP (Reinforcement of African Peacekeeping capabilities) は、二〇〇八年一月に、EUの枠組みで運営されるEURECAPに移行し、アフリカ待機軍の始動に向かって前進している。また、フランスはアフリカ各地のPKOセンターを支援し、アフリカのPKO能力の向上を促している。これらのPKOセンターの内、バマコの平和維持学校、ベナンの地雷除去センターには日本も資金面で協力している。

(2) 経済協力分野での変化

フランスは元来、経済協力の分野でもフランス語圏を重要視してきた。フランスの援助を最も多く受け取っている地域は、フランスにとっての商業的な権益や、エネルギー権益が最も多い地域ではなかった。フランスの主要な通商のパートナーであるナイジェリア、アンゴラ及び南アは、援助受取額が少ない国である。³⁴⁾ フランスの援助協力に関しては、商業的な利益の追求より、フランス語圏の勢力圏における外交的影響力を重視する

傾向があった。アフリカに新たに進出している中国やインドに比べると、フランスはODAを通商の権益やエネルギー権益に付随させる傾向は弱いようである。³⁶⁾これは、フランスが援助政策において、経済的利益と政治的利益を比較した場合、政治的利益を優先してきたことにより説明することができる。つまり、フランスはその援助政策において、経済的権益より、国際社会におけるフランスの発言力の強化、フランスの国際的地位の向上もしくは維持のために、フランスとの関係が伝統的に緊密なフランス語圏アフリカ諸国を優先したのである。それは、ド・ゴールがブラザビルを自由フランスの首都とし、アフリカをフランスの影響力を維持するための勢力圏として看做して以来、綿々として続くフランスのアフリカ政策の一環としての経済協力政策の特徴であった。

しかしながら、アビジャン・ドクトリンが志向したように、フランスの援助から外交的配慮を排除し、より客観的で合理的な基準によって配分しようという動きはサルコジ大統領以前から始まっていた。まず、一貫した援助政策を実現するために組織改革が行なわれた。一九九八年には、AFD（フランス開発庁）が創設され、これまで別々に実施された借款業務と無償資金協力業務が統合された。また、AFDの上流には、首相を長として、関係閣僚によって構成される省庁間国際協力・開発委員会（CICID : Comité interministeriel de la coopération internationale et du développement）が創設され、省庁間にまたがる、援助方針、国別・セクター戦略、優先連帯地帯（Zs.d. : Zone de Solidarité prioritaire）の選択等、省庁間の調整・一貫性を実現する場として機能している。³⁶⁾ZSPの対象国は、アフリカ諸国における人権侵害、民主主義や汚職対策等を基準に、毎年CICIDにより審査されることになり、これにより、フランス語圏アフリカ諸国がもはや自動的に二国間援助を享受することができなくなった。また、AFDは返済の見込みを追及されるため、フランス語圏

アフリカに援助を集中することができなくなった。そして、Z S Pは南アやアンゴラ、ガーナ等、返済能力のある国や、フランスが経済的利益を見出す国へ対象国が拡大された。さらに二〇〇六年六月には、A F Dの行動領域を全アフリカ地域と指定することが決定された。

サルコジ大統領は、そのアフリカ政策における変革を引き継ぎ、援助政策を明確な基準に付随させることを志向した。ケープタウン演説で、サルコジ大統領は、経済協力分野でも経済成長を重視する重要な提案をしている。サルコジ大統領はケープタウン演説の中で、「貧困克服のために、フランスはより積極的に貢献したいと望んでおり、M D G s（ミレニアム開発目標）実現のための財政公約は維持するだろう。しかし、フランスはアフリカの経済成長を加速させるために、よりの絞った方法で援助し、アフリカでの雇用拡大のために、企業の創出を直接的に支援するだろう。そのような理由で、フランスは新たに経済成長を加速させるためのイニシアティブを開始することにした。このイニシアティブはA F Dにより実行に移される。このイニシアティブは、三つの要素によって構成されている。第一に、フランスはアフリカの企業を発展させるために、二億五千万ユーロの投資基金を創作しようとしている。第二に、アフリカの中小企業が銀行の融資や資本金にアクセスし易いように、二億五千万ユーロの保証基金を創作する。第三に、A F Dの民間セクター支援の活動を現在から倍増させる。これは、五年間で二〇億ユーロの貢献である。合計でフランスのイニシアチブは五年間で二五億ユーロになり、直接的または間接的に二千のアフリカの企業を財政的に支援し、三〇万の雇員を創出するだろう。このイニシアティブと合わせると、フランスの二国間支援でのサブサハラアフリカへの財政的貢献は、今後五年間で一〇〇億ユーロに達する」と述べている。⁴⁷⁾

この演説には、二つの重要な点がある。まず、第一にこの演説が南アというアフリカのG D Pの約半分を生

産する国でなされたことである。南アは、その政治的、経済的な重要性に拘らず、フランスの経済協力において、フランス語圏アフリカに比べて重要視されてこなかった。その南アを訪問したことは、フランスが伝統的な勢力圏援助政策から変換を探索していることの証左である。第二に、この演説は経済成長をフランスの援助政策の焦点にすると明言した。このことは、アビジャン・ドクトリンがフランスの援助政策の基準を世銀の構造調整に付随させたことと同様に、フランスの援助政策に明確な基準を与える。つまり、これまで外交的及び政治的配慮によりフランス語圏に優先的に与えられてきた援助を、経済成長という基準によって配分することを意図している。さらに、経済成長という観点から見た場合、ガボンより南アやナイジェリアの潜在能力が高いのは明らかであり、フランスの援助政策の方針の変更を確認することができる。このようなフランスの援助政策の変更を統計的に確認することはまだ不可能であるが、今後の推移が注目される。

(3) アフリカに対する介入の継続

サルコジ大統領のアフリカ外交には、前述したように根本的な変化が見受けられるものの、継続も見受けられる。まず、継続の一例として、これまで程直接的ではないものの、アフリカに対する介入が継続されている点が挙げられる。

二〇〇八年一月三一日から、スーダンの援助を受けるチャド反政府勢力は、チャドの首都ンジャメナにむけて侵攻を開始した。二月二日に首都に侵攻した反政府勢力は、三日、政府軍と戦闘を行った後、一旦首都から退却した。これに対しフランス軍は、ハイタカ作戦で常時駐留している二二〇〇人に加え、二月四日までに二七〇人を増派し、フランス・チャド間で一九七六年に結ばれた軍事協力協定を根拠に、弾薬などの兵站及び

保健面で政府側を支援した。また、リビアがフランスの兵站支援をリビア経由で行うことを認め、さらにフランスに同国の空港を使用することを許可し、フランス軍のアトランティック機二機がリビアの空港から飛び立ち、チャド・スーダン国境と反政府勢力の活動を偵察した。それに加え、フランス軍は自国民保護のために、空港の安全を確保しており、その空港から政府軍のヘリコプターが離陸し、反政府勢力を攻撃した。

そして、反発の強い一方的な軍事介入を避けるために、安保理でイニシアティブを取り、反政府武装勢力による侵攻を非難する旨の議長声明を採択した。そして、安保理議長声明採択後、サルコジ大統領が「フランスが(チャドに対し)義務を行わなくてはならないのであれば、行うであろう(Si la France doit faire son devoir (au Tchad), elle le fera)」と発言し、この発言を受けて、クシュネール外務・欧州問題担当大臣が「フランスの義務は、必要があれば、より決定的な方法で合法的な政府を保護することであろう (Le « devoir » de la France « ce serait de protéger, peut-être maintenant de façon plus décisive si le besoin s'en faisait sentir, le gouvernement légal)」と発言し、軍事介入を仄めかし、反政府勢力に圧力を加えた⁽⁸⁾。

フランスは従来に比し、一方的な軍事介入は避けたが、今次の戦闘における役割は中立的なものではなく、兵站を通じた支援、政府軍が使用する空港の確保、さらには安保理議長声明後の軍事介入の示唆等を通じ、チャド政府軍の勝利に間接的な貢献をしたと考えられる。フランスにとつては、スーダンの支援を受けた反政府軍の勢力が拡大することは、ダルフルのみならず、チャド以西や広大なフランス語圏アフリカの安定に影響する重大な戦略的問題であり、このような間接的な介入を行ったと考えられ、国益を保護するために勢力圏への介入を厭わない従来フランスのアフリカ政策の継続が指摘できる。

しかしながら、二〇〇二年九月のコートジボワールの危機において、安保理の決議を取り付けることに最終

的には成功したものの、安保理決議がフランス軍にマンデートを与えたのは二〇〇三年二月になってからであった。また、チャドに関しては二〇〇六年四月に反政府勢力が首都に向けて進撃した際、シラク大統領（当時）はミラージュ戦闘機による攻撃を直ちに指示した。これに対し今回フランスは、フランス人及び在留外国人保護のために最小限の軍事力を行使しつつも、いわゆる軍事介入のためには、安保理の決定が必要との立場を明確にした。もつとも、安保理議長声明自体は決議に較べ拘束力に乏しく、軍事介入の根拠としては弱いものと言わざるを得ないが、形式上は国連のマンデートを尊重する姿勢を示したと言うことができる。しかし、それがフランスの権益の追求という目的に基づいていたことは否定できないであろう。

（4） ネットワークの継続とその衰退

また、ネットワーク外交も継続されており、特にフォカール・ネットワークの最後の生き残りといわれるブルジ（Robert Bourgi）弁護士が重要な働きをしているようである。同弁護士は、サルコジ大統領と二〇年来の友人関係にあり、定期的にエリゼ宮に出入りしていると言われている。³⁸⁾ 同弁護士は、ガボンの故ボンゴ大統領、コンゴ（共）のサス・ンゲソ大統領と近く、彼らの意思をサルコジ大統領に伝える非公式のメッセンジャーの役割を担っていたと見られている。例えば、二〇〇八年三月にボッケル協力・フランス語圏担当長官が辞任を余儀なくされたのは、ボンゴ大統領がブルジ弁護士を通して、圧力をかけたためだと言われている。ボンゴ大統領は、ボッケル氏の「フランサフリックは死にかけている。フランサフリックの死亡証明書に署名した」（La FrancAfrique est moribonde. Je veux signer l'acte de décès de FrancAfrique）。³⁹⁾ という言葉に狙われていると感じ、ボッケル氏の辞職を求め、成功したと言われている。ブルジ弁護士は、サルコジ政権下でも同

大統領の個人的な顧問として、フランス・アフリカ関係に大きな影響力を保持し、ジュベール大統領補佐官は同弁護士と協力することを余儀なくされた。⁽⁴⁾最終的に同補佐官は二〇〇九年九月にモロッコ大使として転出し、大統領府外交班において同補佐官を補佐していたマレシヨール(Rémi Maréchaux)補佐官及びセルマン(Romain Serman)補佐官も交代させられた。一連の交代劇の背景には、ブルジ弁護士の影響があったことが疑われている。

このようなネットワーク外交の背景には、アフリカの長老たるガボンの故ボンゴ大統領のフランスに対する強い影響力があった。そして、ブルジ弁護士は同大統領の権威を背景として力を持った。しかしながら、時代の経過とともに同大統領の権勢も衰え、影響力はチャドや中央アフリカなどの極少数の国に限られ、コートジボワール等では失われていたようである。⁽⁵⁾そうでありながら、故ボンゴ大統領がサルコジ大統領に影響力を及ぼせたのは、ボンゴ大統領がまだ無名に等しい時からサルコジ大統領を支援し親交を結んできたと言われるように、フランスの若い有望な政治家を見出し、支援する個人的才覚によるところが大きかった。

そのようなサルコジ大統領及び故ボンゴ大統領の個人的関係に依拠した関係が永続的に続くとは考えづらかった。そうであるからこそ、ブルジ弁護士は、本来の影の役割に留まらず、テレビ放送に出演し、公の場で(フランスフリックの秘密について)発言することによって、最後のバーゲンセールを行っていると指摘されていた。⁽⁶⁾

そのボンゴ大統領も二〇〇九年六月に死去し、同大統領の影響力を背景に暗躍していたブルジ弁護士の影響力も低下した。さらに、二〇一一年二月には内閣改造が行われ、過去に首相も務めた与党UMPの重鎮ジュッペ(Alain Juppé)氏が外相に返り咲き、ゲアン事務総長が内相に就任した。ジュッペ氏は、外相に就任する

際に、サルコジ大統領に対しゲアン事務総長の転出を要求したと言われている。これまで、ゲアン事務総長及びブルジ弁護士が外務省に相談することなく、アフリカ外交に介入してきたことを認識していたジュッペ外相は、そのような介入を排除することを狙ったようである。一連の措置は効果を奏し、ブルジ弁護士の影響力は削がれていた。同弁護士は、二〇一一年一月、過去にシラク元大統領及びドゥ・ヴィルパン元首相が故ボング大統領から不正な選挙資金を受け取ったことを暴露した⁽⁴⁴⁾。同弁護士の行動の背景には、低下する影響力をスキャンダルの暴露で補おうという意図が読み取れる。

結論

サルコジ大統領はその外交政策において、経済的利益を非常に重要視する。そのために、アフリカ大陸内では、南ア、ナイジェリアが重要視されており、フランス語圏アフリカの重要性は低下している。また、世界規模でサルコジ外交を観察すると、新興国を重要視するとともに、経済的利益の観点から、アフリカより中東を重要視しつつある。したがって、フランス外交におけるアフリカの地位が相対的に低下し、標準化されるとともに、アフリカ大陸内でも、フランス語圏の重要性が相対的に低下し、他の国々との間にバランスが取られる流れは続くであろう。

他方、サルコジ大統領の就任以前から始まっていたこのようなフランス・アフリカ関係の平均化は、アフリカ大陸におけるフランスのプレザンスの低下に帰結し、そのことが特にフランス語圏諸国の失望に繋がる危険性も孕んでいる。サルコジ大統領の最初のアフリカ訪問（二〇〇七年五月）後、フランス外務省は、駐アフリカ大使四二名の分析、提言を募り、対アフリカ外交の見直しを行っている。アフリカに駐在する四二人のフラ

ンス大使が作成した電報は「アフリカにおいてフランスは影響力を低下させイメージが悪化している。アフリカは、グローバルゼーションに参入し、新興国や米から持ち上げられている。フランス語圏のアフリカ人は、移民、援助等で内向きになったフランスから見捨てられ、十分な見返りを得ていないと感じており、アフリカの若い世代がフランスに背を向ける深刻な危険がある」と述べ、懸念を表明している。⁽⁴⁶⁾

今後のフランスの対アフリカ関係全体を見据えた大きな課題は、過去の仏語圏アフリカとの関係を損なわずに、如何にフランス語圏以外にも良好な関係を築いていくかにある。そのためには、フランス語圏アフリカ諸国の理解を得つつ、彼等らとの過去のからの特権的な関係を再構築 (reorder) する必要があるだろう。つまり、サルコジ大統領がコトヌ演説で述べたように、平等で近代的な国家間の関係を築く必要がある。サルコジ大統領は二〇〇九年三月にコンゴ(共)を訪問し、「フランスがアフリカに期待していることがある。また、アフリカがフランスに期待していることもある。コンゴがフランスに対して期待していることがある。まず、我々が追求する利益は何であるかを明らかにすることから始めなくてはいけないように思える。フランスに関しては、我々の利益は(アフリカと)共通しているだけ、フランスにとってそうすることはますます簡単である」⁽⁴⁷⁾と述べ、共通の利益に基づく関係を築く意思を繰り返した。

前述のように、フランス・アフリカ関係の改革は困難を伴い、チャドのケースに見られるように間接的かつ、形式上は国際的な支持を得た上であるが、旧植民地への介入も継続されている。また、ブルジ弁護士の活躍に見られるように、過去の非公式チャンネルは、衰えつつも残存している。しかしながら、フランスのアフリカ政策の大部分は、大統領の外交チームと外務・欧州問題省に任され、世界の他の地域と同じように処理されている。また、彼らが主導しているアフリカ政策の改革も徐々にではあるが、成果を上げつつあり、ジュッペ外

相の就任及びそのリーダーシップにより、その傾向は強まっている。⁽⁴⁸⁾

注

(一) Il nous faut construire une relation nouvelle, assainie, décomplexée, équilibrée, débarrassée des scories du passé et des obsolescences qui perdurent de part et d'autres de la Méditerranée. Cela implique plusieurs changements de fond, dont certains sont heureusement à l'oeuvre.

D'abord, cette relation doit être plus transparente. Il nous faut la débarrasser des réseaux d'un autre temps, des émissaires officieux qui n'ont d'autre mandat que celui qu'ils s'inventent. Le fonctionnement normal des institutions politiques et diplomatiques doit prévaloir sur les circuits officieux qui ont fait tant de mal par le passé. Il faut définitivement tourner la page des complaisances, des secrets et des ambiguïtés. Il nous faut aussi ne pas nous contenter de la seule personnalisation de nos relations. Les relations entre des Etats modernes ne doivent pas seulement dépendre de la qualité des relations personnelles entre les chefs d'Etat, mais d'un dialogue franc et objectif, d'une confrontation des intérêts respectifs, du respect des engagements pris. Nous voulons dialoguer sur un pied d'égalité, entre partenaires responsables. Notre relation doit être décomplexée, sans sentiment de supériorité ni d'infériorité, sans sentiment de culpabilité d'un côté ni soupçon d'en jouer de l'autre, sans tentative de rendre l'autre responsable de ses erreurs.

(2) DABEZIES Pierre, 《Ou en est la France en Afrique?》, *Cercle PERICLES* (トクトク 国政 雑 4), 29/10/1997.

(3) Ce sont les chars, les avions, la tactique des Allemands qui ont surpris nos chefs au point de les amener là où ils en sont aujourd'hui.

Mais le dernier mot est-il dit ? L'espérance doit-elle disparaître? La défaite est-elle définitive? Non! Croyez-moi, moi qui vous parle en connaissance de cause et vous dis que rien n'est perdu pour la France. Les mêmes moyens qui nous ont vaincus peuvent faire venir un jour la victoire. Car la France n'est pas seule ! Elle n'est pas seule ! Elle n'est pas seule ! Elle a un vaste Empire derrière elle. Elle peut faire bloc avec l'empire britannique qui tient la mer et continue la lutte. Elle peut, comme l'Angleterre, utiliser sans limites l'immense industrie des Etats-Unis. Cette guerre n'est pas limitée au territoire malheureux de notre pays. Cette guerre n'est pas tranchée par la bataille de France. Cette guerre est une guerre mondiale.

フランスのアフリカ政策に関する考察

- (4) 片岡貞治「アフリカ紛争…フランスの視点（仏の対アフリカ政策から）」、国際問題研究所
- (5) 大統領府のアフリカ班はサルコジ大統領の選出後、外交班に統合された。
- (6) 協力省は一九九九年に外務省に統合され、国際協力・開発総局として一つの局になったが、務大臣付きであるとはいえ、準閣僚級の協力・仏語圏担当長官が政治任命され、アフリカ外交と担うなどの名残がある
- (7) BANE GAS Richard, MARCHAL Roland, MEMMON Julien, "sortir du pacte colonial", *Politique Africaine*, Mars 2007, n.205, Paris, Karthala, P.16.
- (8) 同上 P.16.
- (9) 片岡貞治 「アフリカ紛争…フランスの視点（仏の対アフリカ政策から）」、国際問題研究所
- (10) 同上
- (11) 代表的な著作に Verschave François-Xavier, *Françafrique*, Stock, 1998, Paris がある。
- (12) 例えば、ビアフラ戦争。フォカールは西アフリカの大国であり、英語圏であるナイジェリアの台頭を牽制するためにイボ族によるビアフラの独立を支持し、武器援助を実施した。

- (13) このような例は枚挙に暇がないが、例えば、チャドにおけるデビー氏によるハブレ政権の転覆の支援、中央アフリカにおけるボジゼ元参謀長によるパタセ政権転覆の支援、コンゴ（共）におけるサス・ンゲソ大統領の反体制派抑圧の支援等が挙げられる。
- (14) Verschave François-Xavier, *Françafrique*, Stock, 1998, Paris, P.65.
- (15) Puis-je me permettre de vous dire que c'est la direction qu'il faut suivre. Je vous parle comme un citoyen du monde à d'autres citoyens du monde : c'est le chemin de la liberté sur lequel vous avancerez en même temps que vous avancerez sur le chemin du développement. On pourrait d'ailleurs inverser la formule : c'est en prenant la route du développement que vous serez engagés sur la route de la démocratie.
- (16) BANEGAS Richard, MARCHAL Roland, MEMION Julien, "sortir du pacte colonial", *Politique Africaine*, Mars 2007,n205, Paris, Karthala,p13.
- (17) 同上
- (18) « Pour moi, le maintien de la présence française en Afrique du Nord, de Bizert à Casablanca, est le premier impératif de toute politique. »
- (19) ジャン・クリストフ・ミッチェランは「Papa n'a dit」（パパがこう言った）と異名を取った様に、ミッチェラン大統領のメッセージをアフリカ諸国の元首に伝えるメッセンジャーの役割を果たした。
- (20) 例として、*La Criminalisation de l'Etat en Afrique*, Stephen Ellis et Béatrice Hibou, Bruxelles, Complexe, Coll. Espace international, 1997
- (21) BANEGAS Richard, MARCHAL Roland, MEMION Julien, "sortir du pacte colonial", *Politique Africaine*, Mars 2007,n205, Paris, Karthala,p15.

- (22) 同上 p.15.
- (23) 実際には、Total社などの非政府アクターが非公式にサス・ンゲンを支援したことが指摘されている。例えば、YENGO Patrice, *La guerre civil du Congo-Brazzaville 1993-2002*, Paris, Karthala, 2006.
- (24) 大統領府のアフリカ班は、介入を志向したようである。S.Smith, «La dengagement de la France à l'epreuve de la Côte d'Ivoire », *politique Africaine*, n89,mars 2003,p.112-126.
- (25) Contrairement à la politique de Jospin, notre position est de ne pas exclure a priori une intervention, car c'est dissuasif (...). Personne ne doit pouvoir se dire qu'il peut agresser le voisin sans que la France ne bouge. Jaques Champagne de Labriolle (« numéro deux » de la cellule africaine de l'Elysée), lors d'une conférence organisée le 19 mai 2004 par la Politique africaine sur la thème « Intervenir pour la paix en Afrique ». 1冊目 BANEGAS Richard, MARCHAL Roland, MEMMON Julien, "sortir du pacte colonial", *Politique Africaine*, Mars 2007, n205, Paris, Karthala,p.15.
- (26) 同上 p.21.
- (27) 私は、ツチ族を虐殺したフツ族政権に対し軍事援助を行っており、作戦の中立性が疑われた。
- (28) BANEGAS Richard, MARCHAL Roland, MEMMON Julien, "sortir du pacte colonial", *Politique Africaine*, Mars 2007, n205, Paris, Karthala,p.22.
- (29) 例えば、「アフリカは、十分に歴史に入ってこなかった (L'Afrique n'est pas assez entrée dans l'histoire)」等。
- (30) La colonisation n'est pas responsable de toutes les difficultés actuelles de l'Afrique. Elle n'est pas responsable des guerres sanglantes que se font les Africains entre eux. Elle n'est pas responsable des génocides. Elle n'est pas responsable des dictateurs. Elle n'est pas responsable du fanatisme. Elle n'est pas responsable de la corruption, de

la prévarication. Elle n'est pas responsable des gaspillages et de la pollution.

- (E) Je souhaiterais, à cet égard, faire quatre propositions. La première porte sur les accords de défense entre la France et les pays africains. Ils doivent refléter l'Afrique d'aujourd'hui et non pas l'Afrique d'hier. Ils doivent reposer sur les intérêts stratégiques de la France et de ses partenaires africains. Je ne dis pas qu'il faille nécessairement faire table rase et tout effacer d'un seul trait de plume. Mais je dis que la France souhaite engager des discussions avec tous les Etats africains concernés pour adapter les accords existants aux réalités du temps présent et en tenant le plus grand compte de leur propre volonté. Elle sera également ouverte au dialogue avec tous ceux qui souhaiteront nouer avec elle un nouveau partenariat en matière de sécurité. Deuxièmement, je propose de refonder nos relations sur le principe de transparence. La transparence, c'est la meilleure garantie pour des relations solides et durables, le meilleur antidote aux fantasmes et aux incompréhensions si complaisamment répandus lorsqu'on évoque les liens qui unissent la France aux Africains. Contrairement à la pratique passée, nos accords devront être intégralement publiés. Je compte également associer étroitement le Parlement français aux grandes orientations de la politique de la France en Afrique.

Troisièmement, je propose que la présence militaire française en Afrique serve en priorité à aider l'Afrique à bâtir, comme elle en a l'ambition, son propre dispositif de sécurité collective. L'Union africaine souhaite disposer de forces en attente à l'horizon 2010 ? 2012 ? Que cet objectif soit aussi celui de la France ! La France n'a pas vocation à maintenir indéfiniment des forces armées en Afrique. (...) Enfin, ma dernière proposition vise à faire de l'Europe un partenaire majeur de l'Afrique en matière de paix et de sécurité. C'est le sens du partenariat conclu entre nos deux continents à Lisbonne en décembre dernier. Il appartient désormais aux Européens et aux Africains de le

- construire ensemble. C'est dans notre intérêt à tous, car une Europe forte a besoin d'une Afrique forte.
- (32) Libre Blanc sur la défense et la sécurité nationale, P.156. その後、アフリカにおける仏軍基地は「リーブルビルトミン」ブチに集約された。
- (33) 仏首相府HP http://www.premier-ministre.gouv.fr/acteurs/interventions_premier_minist
- (34) HUGON Philippe. La politique économique de la France en Afrique, *Politique Africaine*, Mars 2007, n.205, Paris, Karthala, p.60.
- (35) 同前, p.60.
- (36) 二〇〇八年、仏ODA白書
- (37) J'ai également souhaité que la France intervienne de manière plus ciblée pour favoriser l'accélération de la croissance économique. Je souhaite qu'elle contribue directement à la création d'entreprises africaines génératrices d'emplois. C'est pourquoi j'ai décidé de lancer une initiative de soutien à la croissance économique, ouverte à d'autres partenaires. Cette initiative, qui sera mise en œuvre par l'Agence Française de Développement comporte trois composantes : D'abord un fonds d'investissement de 250 millions d'euros prendra des participations dans d'autres fonds mixtes ou thématiques. La deuxième composante est la création d'un fonds de garantie doté aussi de 250 millions d'euros. Il doit permettre de faciliter l'accès des PME africaines au crédit bancaire et au capital. La dernière composante est le doublement de l'activité de l'Agence Française de Développement en faveur du secteur privé, soit un engagement de 2 milliards d'euros sur 5 ans. Au total, cette initiative mobilisera deux milliards et demi d'euros en 5 ans ; qui financeront directement ou indirectement près de 2000 entreprises, pour la création de 300 000 emplois. En intégrant cette initiative, le total des engagements

financiers français bilatéraux pour l'Afrique subsaharienne s'élèvera donc à 10 milliards d'euros sur les 5 prochaines années.

(38) <http://www.france-info.com/mon-de-afrique-2008-02-06-tchad-le-president-deby-remercie-paris-92650-14-18.html> (アクセス日時：二〇一一年一〇月二二日)

(39) GLASER Antoine, SMITH Stephan, *Sarko en Afrique*, Plon, Paris, 2008, pp.178-202.

(40) ブルジ弁護士は二〇〇八年四月二三日放送されたカナルプリュスの番組ディマンシユプリュスに出演し、「私は、ボツケル氏が、我々の将来を侮辱したと感じた。そして、二回の統一地方選挙の間に、彼が態度を軟化させないと分かったので、私は、ゲアン氏の助けを借りて、サルコジ大統領に会いに行き、『ニコラ、君は分かっているだろう。嵐が迫っている。私たちは後戻りできないところまで行き、ボンゴ父さんが怒りを爆発させるだろう』と言った。J'ai trouvé que M Bockel insultait l'avenir, et entre les deux tours des municipales, comme je voyais qu'il ne se calmait pas, je suis retourné voir le président de la république, aidé en cela par Claude Gueant, et je lui ai dit : 'Tu sais Nicolas l'orage gronde, je crois que nous allons atteindre le point de non-retour et le père Bongo va faire exploser la marmite.」と述べ、サルコジ大統領にボンゴ大統領の怒りを伝えたことを認めている。

(41) GLASER Antoine, SMITH Stephan, *Sarko en Afrique*, Plon, Paris, 2008, pp.178-202.

(42) 同上 p.192.

(43) 同上 p.203.

(44) 二〇一一年九月二一日付 Journal du dimanche

(45) 仏とナイジェリアは、二〇〇八年六月に、経済協力、投資促進、平和構築などの多岐に亘る戦略的パートナーシップを締結した。

(46) 四月二七、二八日付ルモンド紙

(47) L'ambition que je porte, c'est de refonder une relation privilégiée. Pour refonder une relation privilégiée, peut-être faudrait-il que nous prenions le temps, les uns et les autres, de dire ce que nous attendons les uns des autres. Il y a une attente de la France vis-à-vis de l'Afrique, il y a une attente de l'Afrique vis-à-vis de la France, il y a une attente du Congo vis-à-vis de la France. Il faut, semble-t-il, commencer par assumer dans la clarté les intérêts que nous poursuivons.

(48) 本稿は筆者が在フランス日本国大使館勤務時代(二〇〇八年一月～二〇一〇年十二月)に執筆したものに加筆・修正したものである。内容は全て筆者自身の観点に基づく私見であり、何ら大使館の意見を代表するものでない。

